

東京バッハ合唱団 月報

[第 571 号] 2010 年 1 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.571
January 2010

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 104 回定期演奏会の曲目に寄せて

信じることの 4 つの様態

大村 恵美子

新年おめでとうございます。

巨大企業が姿を消したり、世界一極覇者と見なされた超大国がその通貨価値さえ揺るがしたり、もう何のよりどころも見えなくなったような今日この頃ですが、新年ともなれば、ひとまず前向きに希望をめざすのが、人間の素直な気持ちでしょう。

どんな時世でも、生まれたばかりのみどりごには、目をそばだてるような変化は見られません。幼児も、昔と変わらない、みずみずしい反応を表して、私を安心させてくれます。転変きわまりないのは大人の社会ばかりのように思われるのです。

今の世界に欠けているのは、煎じ詰めれば相互信頼の念ではないでしょうか。ろくに自国の食生活、教育などに万全を期することなく、外敵にそなえた軍備にうつつをぬかす。そんな気がかりな外国を憂えるかわりに、一般民をどんどん交流させて、たがいに通じ合い、友情を育むほうが、よほど幸せでしょう。兵器などもたず、物や心を分かち合うほうが、よほど信頼し合えるでしょう。

何ごとも信じられないから、疑心暗鬼となって足を踏み出せない、相手がどう出るとびくびくして直言することもできず、視線も正面からまっすぐに交わせない。

もう地球上は、瞬時にあらゆるニュースが伝わるのに、国内で他国のことを、危ないぞ、警戒せよ、うっかり誘いに乗ると、わめきちらす。判断をあやまり、失態をおかして相手につけこまれかねない自分のことが、まず信じられない。こんな状態では、つねに、一寸先は闇、となります。

* * *

次の、第 104 回定期演奏会は、6 月 6 日、石橋メモリアルホールと決まりました。1 年半ぶりの開催となる定期公演の 4 曲のカンタータは、期せずしてこんな世界の現状に、有益なメッセージを伝えるものです。〈相互不信の地獄から、信頼の天国へと地球上を整えよう〉、これです。死後に審かれて、天国・地獄と離ればなれに引きゆかれるのではなく、天国も地獄も、憎みあい、排除しあい、殺しあう、この人間の現実世界にこそあるのです。

BWV124《イエス 共にあらん》と BWV17《感謝ささげ ほめ歌う者に》は、自信なく揺らぐ自己を信ぜよ、という

のではなく、こんな危うげな自分をさえも支え、ともに歩んでくれる存在を、しっかりと仰ぎ信じるようにと、勧めます。

むごき死 襲いて
わが身を 砕くとも

...

信ずれば 慰む
イエス 共にありと

(BWV124 第 3 曲 テノール・アリア)

そのうちの 一人

癒されし わが身 知りて

声あげ

神を 頌め讃えたり

(BWV17 第 4 曲 テノール・レチタティーヴォ)

東京バッハ合唱団 第 104 回定期演奏会 予告

J. S. Bach

カンタータ第 124 番 (イエス 共にあらん)
»Meinen Jesum laß ich nicht« BWV 124

カンタータ第 52 番 (悪しきこの世よ なれを頼まじ)
»Falsche Welt, dir trau ich nicht« BWV 52

カンタータ第 17 番 (感謝ささげ ほめ歌う者に)
»Wer Dank opfert, der preiset mich« BWV 17

カンタータ第 4 番 (キリスト 死につながれしが)
»Christ lag in Todesbanden« BWV 4

日本語演奏 (大村恵美子訳詞)

光野孝子(ソプラノ) 佐々木まり子(アルト)

鏡 貴之(テノール) 新見準平(バス)

草間美也子(オルガン)

東京カンタータ室内管弦楽団(オーケストラ)

大村恵美子(指揮)

日時 2010 年 6 月 6 日 (日) 14:00 開演

会場 石橋メモリアルホール
(2010 年 5 月 開館予定)

入場料 3000 円 (全自由席)

入場券発売開始：2010 年 2 月 1 日

感謝ささげ ほめ歌う者に
救いを示す道 あらわさん
(BWV17 第1曲 合唱)

このように、信じるほうにシフトを定めた人生の幸福と、そのことへの感謝を歌っています。

それに対し、BWV52《悪しきこの世よ なれを頼まじ》(ソプラノ独唱カンタータ)では、信じ合えない修羅場のこの世のほうに、悩まされながらも未練をおぼえて引きずられる、そうした心に教え諭します。

悪しき この世よ
われ なれを 頼まじ
(BWV52 第2曲 アリア)

世の狂気
畏もて 陥れんと 迫るとき
主のみ手
わが かたえに 在り
(BWV52 第4曲 レチタティーヴォ)

BWV4《キリスト 死につながれしが》は、多くのバッハ愛好者の心をひきさらう魅力をもった、バッハ青年期の秀逸作品ですが、異様なほどの緊迫感に圧倒されます。人間を死からさえも救い出す神の不思議を、不思議奇蹟として驚き仰いだ、人間の現場の雰囲気、生々しく歌い上げています。

奇しき戦(いくさ) あり
死と生 争いぬ
いのちは 勝ちを得
死を砕きたり
(BWV4 第5曲 合唱)

* * *

このように、新年早々ととりかかる4曲は、いつもながら感じ入るバッハの大きく深い今日性を、またしても示すものですが、私たちが、どんな大義名分に銘打たれたものであれ、もう地上での殺し合いは、いっさい許さないという決意を新にするための、力強い応援歌となるでしょう。

平和は、各人の殻に閉じこもってはいは必敗となる、しっかり進んでもぎ取らねばならないものなのです。次の代を受けつぐ子どもたちのために、私たちはさらに、この、バッハの音楽という強力な武器をたずさえて、雄々しく出てゆきましょう。

当合唱団が定期演奏会で上演するカンタータの歌詞全文は、すべてインターネット上の下記サイトでご覧いただけます：<http://www.ab.auone-net.jp/~bach/>

第104回定期演奏会の使用楽譜は、当合唱団出版局から発行されています(ブライトコプフ版底本、ドイツ語/日本語並記、A4判)。事務局までお問い合わせください。

BWV4 (1900円)、BWV17 (1400円)
BWV52 (1200円)、BWV124 (1400円)



世田谷中央教会 特別演奏会

「ブラボー！」のクリスマス音楽会

千葉 光雄(団員・バス)

12月5日の特別演奏会はすっかりクリスマスバージョンに飾り付けられた世田谷中央教会に出迎えられた。当日は夕方から雨になったにもかかわらず、会場は熱心な聴衆でうまった。前半はカンタータ124番とモテットの1番、後半はクリスマス・オラトリオの第2部であった。

クリスマスを迎えるにふさわしいカンタータ124番で穏やかに始まり、モテットに入ると8声部の大合唱となり、神への賛美が力強く会堂に満ち溢れた。ある団員は、歌っていてあまりの感動に最後は声がつまって歌えなくなってしまったと話してくれた。後半のクリスマス・オラトリオの、鏡貴之さんのソロの清澄な歌声には会衆が息をのんで聞き入っているのが感じられた。また、団員の川合満里子さん(S)、室田悟さん(B)のソロも大変立派で誇らしく思った。そして最後に会衆賛美に登場した児童バンドが何と言ってもみんなの心を和ませた。最後の子どもたちのアンコール曲が終わると「ブラボー！」の大きな賛辞をいただいた心あたたまる演奏会であった。

終わりに、合唱団を美しいフルートで導いてくださった山田恵美子さん、そして何声部ものオーケストラパートを素晴らしい集中力で支えてくださったピアノの内山亜希さんに心から感謝します。本当にありがとうございました。



リハーサル中の「こどもバンド」ヴィルトゥオージ

1 年を振り返って

加藤 剛男(団員・バス)

2009 年の東京バッハ合唱団の歩みは、合唱団 47 年の歴史の中でも、特筆すべき年でした。

前の年に大村恵美子先生、健二さんご夫妻によるヨーロッパ演奏旅行の下見が実施され、すべてが、夏の第 5 回の実施へ向けて進められて行きました。旅行へ参加される方々の財政的負担および体力的負担を軽減するため、2009 年は 1000 名規模のホールで開催される定期演奏会は実施せず、春と 12 月に教会で特別演奏会を行うことになりました。

5 月、荻窪音楽祭、旅行の演奏曲を披露

5 月 17 日(日)には、「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会および日本キリスト教団荻窪教会主催による『J. S. Bach 教会音楽の午後』と題して「カンタータ 8 番、131 番、宗教歌曲より BWV446、507、479、ミサ曲より Kyrie, Gloria, Sanctus」が、大村恵美子指揮、ソプラノ光野孝子、フルート若松純子、オルガン金澤亜希子というプログラムで開催されました。どの曲も、第 5 回ヨーロッパ演奏旅行で演奏する曲でした。会堂が、格別に響きのよいところで、まさにヨーロッパの教会を思わせる環境で、演奏旅行の事前上演の場所としては、最適な会場でした。当日は、荻窪教会初まって以来という 220 名を超える多人数の聴衆が集まり、会場は熱気に包まれました。荻窪教会牧師小海基先生もテノールを歌って応援してくださいました。小海先生も、おっしゃっておられましたが、「死」「罪」という重いテーマのカンタータでしたが、それを重苦しく歌わせるメロディーではない意外性があり、新しい発見に満ちた曲”で、バッハの音楽性を味わわせるものでした。



8 月、第 5 回ヨーロッパ演奏旅行、価値ある経験

このたびのヨーロッパ演奏旅行は第 5 回目で、生涯忘れることのできない、最も価値ある演奏旅行でした。参加人数は、25 名と過去の演奏旅行で最小の人数でしたが、合唱団員の、指揮者に対する集中力は計り知れないものがあり、演奏で最も重要と思われる「思いの一致、ハー

モニー」がありました。

フライブルクの大聖堂では、バッハのミサ曲を演奏することができ、大聖堂楽長(ドームカペルマイスター)ペーマン氏からは“バッハの音楽を通して、カトリックとプロテスタントが一つのものとなりました”の言葉をいただき、またフライブルク・バッハ合唱団の指揮者ボーアレー氏からは、“バッハの音楽を通して、2つの国民を1つにすることができました”との言葉をいただきました。

シュトゥットガルト・パウロ教会では、パウロ教会聖歌隊と東京バッハ合唱団とが合同で、カンタータ 8 番と 191 番を演奏することができました。まさに、2つの国民が1つになって主をほめたたえる姿でした。またムターハウスでは、補助席まで出された礼拝堂での演奏会でしたが、集われたすべての人々と、神の国へのあこがれを共にするひとときでした。このように、いずれも過去 4 回のヨーロッパ演奏旅行では、経験したことのない画期的な価値ある演奏会でした。

12 月、世田谷中央教会でのクリスマス音楽会

12 月 5 日(土)には、世田谷中央教会で『バッハの音楽でクリスマス』と題し「カンタータ 124 番、モテット 1 番、クリスマス・オラトリオ第 2 部」が大村恵美子指揮、テノール鏡貴之、フルート山田恵美子、ピアノ内山亜希、ソプラノ川合満里子(団員)、バス室田悟(団員)合唱・東京バッハ合唱団というプログラムで開催されました。教会の特別演奏会では初めて、事前に有料整理券が発行され、聴衆 100 名という、会堂がほぼ満席で演奏を聴いていただくことができました。17 年前の 1993 年 1 月 9 日(土)から、毎週土曜日午後、東京バッハ合唱団の練習会場としてお借りしている世田谷中央教会に対し、今回私ども合唱団の感謝を込めて、わずかでも献金をすることができましたことは、何よりでした。

年末恒例のクリスマス祝会

12 月 14 日(月)のクリスマス会は、バスの白井均さん司会による用意周到な、多彩なプログラムのなごやかな会でした。参加者は、お客様で後援会員の青木道彦様を含め 22 名の方々と、全員のスピーチ、金澤亜希子さんの



情熱的で、若さがほとばしるピアノ独奏(リストの「ラ・カンパネラ」)内容を歌いきった川合満里子さんの独唱(「クリスマス・オラトリオ」からアルト・アリア「そなえよシオン」)全員による讃美歌 21 の 246 番、讃美歌 104 番、ミニ・バザーとまことに充実したものでした。

そのなかで、バス団員の森永毅彦さんからは、1 年を締めくくるのにふさわしい、素晴らしいスピーチをいただきましたので、私なりのまとめ方でご紹介させていただきます。

「私は、1980 年に初めて東京バッハ合唱団の練習に参加しました。この目白聖公会の練習場をのぞいたその日に入団しました。合唱団会計の中山悦朗さん(故人)からは、「森永さん、入団はよく考えてから決めた方がいいですよ、月が替わってからだと 1 月分得しますから」と言われましたが・・・。

私は、合唱団に入る前は、プロとアマの 2 分法で考えていました。アマチュアは、プロの演奏を聴くものだと考えていました。しかし、東京バッハ合唱団の練習に来てみて驚いたのは、アマが演奏しているということでした。その日は、カンタータ 4 番の冒頭、ハレルヤの大合唱を練習していました。その時、私は心を揺さぶられました。バッハの曲に打たれました。また、歌いながら感動するという新しい発見をしました。

宗教の世界に、聖職者と平信徒がいます。アマにあたる平信徒は、宗教心の面で劣るのかという考えもありますが、プロにならなくても、アマが人を感動させることができるという体験をしたのです。アマなりに何かできると気づかされたのです。

今回のヨーロッパ演奏の中でも、ムターハウスでの体験は、他の演奏会と違う体験でした。施設長のご挨拶にありましたが、「皆さんが、バッハに傾倒しているのが、ひしひしと伝わってきました。また、バッハの喜びが、今後も末永くお互いの絆でありますように」という言葉は、非常に嬉しい言葉でした。まさに、私たちのバッハ演奏が、聴衆の方々に伝わった気がいたしました。」

新しい年、2010 年は、いよいよ定期演奏会が復活いたします。6 月 6 日(日)には、一層充実した演奏をしたいものです。

第 5 回ヨーロッパ演奏旅行の「記念 CD」「記念文集」が出来上がりました。後援会員および旅行基金ご寄付の方々のお手許には、近々お届けできるはずです。

なお、若干の予備がございます。希望者にはお願ひいたしますので、お申し出ください。

・頒価：『記念 CD』(2 枚組み) 600 円、『記念文集』(B5 判 64 頁) 600 円、いずれも送料込み。

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 22>

カンタータ第 72 番 (みなすべて み心のままに)

涙した。この曲を聴きながら様々な思いが去来し、涙を禁じえなかった。新年の月報なのに、いきなり湿っぽいのも、失礼かもしれない。しかし、だからこそ、新しい年のはじめ、この一曲をぜひ皆さんにも味わって欲しいと心から願っている。

新年にむけて、皆さんのご多幸をと祈りながらクリスマスカードや年賀状を書く。しかし、私自身、いいことづくめの一年などあったらどうか、と振り返る。いや、いいことづくめでないことを承知しているからこそ、ご多幸を祈るのかもしれない。色々あったが、振り返るとすべて無駄なことなどなかった。そして、今も個人的には課題を抱えての新年の船出となる。

さて、キリスト教は、自分の思いどおりに行かなくとも、神のみ心として受け止める信仰である。しかし、すべてを自分で背負い込むのではない。現実の憂い、悩みを、とても私たちは一人では背負いきれない。それほど強靱ではない。人は、弱く、もろい存在ではないだろうか。そのような人の 貧しき家に入り 恵みに満た (第 3 曲、バス・レチタティーヴォ)してくれるお方がいる、すべてを受け止めてくださるお方がいると信じている。それ故 みなすべて み心のままに (第 1 曲、合唱)という心境に収まり、悩みから解き放たれるのだろう。彼が 悩みを知り そを解き放つ (第 3 曲)のである。

この曲は、1726 年 1 月 27 日(顕現節後第 3 日曜日)ライブツィヒで初演された。ライブツィヒでは、バッハも辛酸を舐めた。市参事会とぶつかり合った。それまでに、妻を亡くし、子どもも亡くした。この曲は、彼の実存をかけた一曲にも聞こえてくる。最初の合唱は、不安な雰囲気動機で始まるが、最後は みなすべて み心のままに / これぞ わが道 といって安定する。印象的である。他のアリア、レチタティーヴォも歌詞を読みながら聞くと(*脚注)胸が詰まる。

最後のコラールは《マタイ受難曲》の第 25 曲としても採用された、あのコラール「み心は つねに成し遂げらる」だ。この CD の演奏のソリストは、光野孝子氏、佐々木まり子氏、渡邊明氏である。わたしが《マタイ》をご一緒させていただいた方々である。懐かしい。

今年も、公私ともに悲喜こもごもであろう。だからこそ みなすべて み心のままに、これぞ わが道 と心に決めて、新年をスタートしたい。

(やなぎもと・ひろし、団友・蕃山町教会伝道師)

CD バッハ・カンタータ 50 曲選 [第 9 巻] に収録。S 光野孝子、A 佐々木まり子、B 渡邊明・大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団 / 東京カンタータ室内管弦楽団。2004 年録音(第 96 回定期演奏会、石橋メモリアルホール) 楽譜：「50 曲選」No. 23

*) 全歌詞は、右記サイトでご覧いただけます：<http://www.ab.auone-net.jp/~bach/>